

## (31) 愛宕神社 (あたごじんじゃ)

住所：三重県伊賀市愛宕町1830

TEL：0595-21-5864

参拝日：2013年11月27日、2015年1月10日

主祭神：火産靈大神(火之迦具土神)

祭神：市杵島姫、櫛御氣野命、猿田彦命、廣國押武金日命

境内神社：清春稻荷神社(宇賀御魂神)、末廣稻荷神社(宇賀御魂神)、  
金刀毘羅神社(大物主神)、八幡神社(應神天皇)



鳥居と拝殿



本殿



手水舎と井戸

由緒(境内石碑)

部分的に文字が潰れて判読困難な文字は○  
で示した。

愛宕神社由来記(境内石碑)

當愛宕神社は伊賀の国原が生み成された神代のむかし朝日岳に○○火産靈大神の磐鏡であり、市杵島姫、櫛御氣野命、猿田彦命、廣國押武金日命の神々を○き祀り、これらの神々を総じて阿多古大神と称し奉る古代神祇の神籬である。神域は天正9年兵火に焼かれて灰燼に帰したが、乱後修験行者小天狗清蔵坊の勧進によって再興を○○に至った。折柄、伊賀の領主藤堂和泉守高虎公が城郭普請をはじめるにあたり、異の方位に鎮守する地主神の神威を畏れかしくみて十余石の神領を寄進し国土安穩の祈願所として制札を下賜わされてより以来毎年国中より初穂米32石の供餞が行われ領民ならびに近国の崇敬厚く神威○○たるものがある。明治維新ののち祀典は神餞幣帛供進の○○○○○○社の神格に列せられた。神殿は桁間五間、梁間二間、向拝三間の檜皮葺で単層入母屋造りで唐破風の向拝を配する権現造り○○○○○○○○初期の建造物として昭和37年2月14日県教育委員会から県指定文化財・建造物の指定をうけた。

昭和59年○月○日

石の鳥居をくぐると左側に手水舎、正面に拝殿がある。手水舎の隣の竹囲のなかには石の蓋をした井戸があり、正面の瓦屋根の棟の所には竜の彫り物がみえる。本殿は県指定文化財・建造物となっており、伊賀市教育委員会の境内案内板によると

「本殿には、元和2年(1616年)大檀那藤堂高虎の棟札があり、同年の造営と考えられる。桁行5間、梁間2間、入母屋造、向拝3間で向拝には軒唐破風がつく。





屋根の棟の竜の彫刻



鳥居

屋根は檜皮葺であったが後に銅板葺に改め、軒は二軒繁垂木とする。平面は正側三方を縁にして擬宝珠高欄をめぐらしている。

本柱は総円柱で、土台、縁長押、内法長押、頭貫で軸部を固め、組物を出三斗とする。木鼻は隅柱だけでなく柱頭に丸彫りの獅子像、竜を入れ、正側三面には中備として墓股を入れ、向拝にも彫刻的要素を多用している。

全体に極彩色を施し、彫刻を見せ場とした華やかな作風は、この時代の代表的な建築である。

(昭和37年2月14日指定)」と記されている。

拝殿の右手にも参道があり、石の鳥居をくぐると階段があり、その下には大きな朱色の鳥居とその両側に石灯籠があった。

鎮守の森にはアラカシ、サクラ、スギ、サルスベリ、ヒノキ、クスノキ、イチヨウ、シュロ、クロガネモチ、サカキ、エノキ、アオキ、シロダモ、ミツバアケビ、カキノキ、タブノキ、アカメガシワ、イヌマキ、ネズミモチ、ケヤキ、ヤブラン、メタセコイヤ、ヤブツバキ、ヤツデ、チャノキ、マンリョウ、センリョウ、アカガシ、トウカエデ、モチツヅジなどがある。

祭祀は例祭7月23日、祈年祭2月、秋祭11月14日、新嘗祭11月15日である。

宝物等：棟札 1枚（元和2年正月23日）、神号軸 1幅（伝後陽成院天皇御宸筆）、愛宕神社勸請令旨 1枚、藤堂高虎公寄進状 1巻、藤堂高次公社領寄進状 1巻  
特記事項：7月23日例祭の夜の500発の打上げ花火が上野の夏の風物詩であり数万人の参拝者で賑う。11月14日の秋祭には献湯神事が行われる。

由 緒：（三重県神社誌）

当社は往古より現在地に鎮座しているが、「明細帳」に「伊賀国旧国主藤堂高虎侯発願元和元年10月6日境内地及其他寄進せられ同3年2月18日建立開基は同社別當大福寺住職小天狗清蔵坊たり、寛文9年5月11日、社領を寄進せられ又伊賀国中より毎年初穂米麦32石の神納在之園主視崇敬の社なり」とある。愛宕神社の鎮座せる山を愛宕山（朝日嶽）といい、神代より火之夜藝速男神の座す神奈備として崇敬されていた。仏教が伝来し、朝日嶽は、密教的な山嶽信仰の修行の場となった。それによって、火之夜藝速男神は愛宕権現、勝単地藏、太郎棒天狗と称される。

更に中世には、ここに薬師瑠璃光如来の阿蘭若処が出現して近江国甲賀郡飯道山の飯道寺の末流教雲院が建立された。小天狗清蔵坊は、伊賀国伊賀郡山出村に生まれ、全国の霊山にて修行し、多くの社寺の再興修復を行った。小天狗が教雲院に入ってから、領主が藤堂和泉守高虎に代わり、高虎公は小天狗に深く帰依し、城郭の坤を守護する祈願所を朝日嶽に造営させた。元和2年（1616）正月32日に社殿の上棟が成った。これより教雲院は、別當に定められ、寺号を大福寺と改め、嵯峨大覚寺の末寺におかれ、大覚寺の門跡宮の令旨を受け後陽成院の御宸筆「愛宕山」の神号を賜り、「伊賀国上野新愛宕権現宮」と称した。それより歴代の領主の崇敬が厚かったが、明治4年（1871）に神仏分離により、愛宕権現宮は愛宕神社と改められた。明治末より、火伏の神として伊賀五社の一として、他県からも崇敬を集めている。元和創建の社殿は全体に極彩色が施され、その様式は桃山時代の建築様式が濃厚に残っており、昭和37年2月14日、三重県教育委員会指定の建造物文化財となり、昭和51年から2年間にわたる保存修理によって創建当時の彩色鮮かな社殿が復元された。